



その想い



第4号

発行人：谷泰智
28年6月7日発行

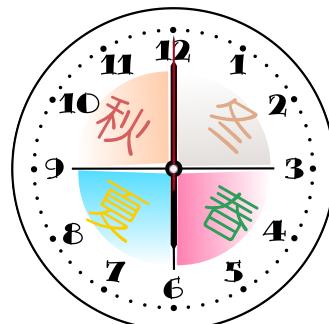
★ 献茶彼岸会のご報告

去る3月21日、午前午後の両部合わせまして20名の方々にお参りいただきました。また、当日不参加の御連絡などお気遣い賜りましたことに、この場で御礼申し上げます。

御陰様で好評につき、来年春のお彼岸中にも開催する予定です。出来立ての温かいお抹茶をおかわりすることもできますので、是非お気軽に越しください。



★ 四季に出会うために



左のイラストをご覧下さい。私の独断で春夏秋冬をアナログ時計の上に配置してみました。このイラストを見ながら改めて考えてみると、夏休みと呼ばれるものは夏真っ盛りにあるのではなくて、どちらかと言えば夏の終わりに位置しています。

しかしながら、世間では「真夏と言えば8月」という感覚をお持ちの方が多いように思われます。実際の季節の間隔と我々の感覚の間には一月半くらいのズレがあるのではないか・・・？あくまでも私個人による仮説ですが、近頃そんなふうによく思います。

年の瀬を向かえる頃、「もう一年終わるねえ、早いね～！」なという声をよく耳にするのは、このズレのせいではないかと思うのです。7月に入ってからの川遊びにどこか出遅れた感じを抱いていた私ですが、今年からは一段と前のめりに、四季それぞれの魅力ある情緒を見逃すことなく、敢えて欲を出して、季節ごとの素晴らしいを感じていこうと思っています。

『柳は緑、花は紅』とは有名な禅の言葉ですが、これには『ありのままの自然の美しさを讃えよ。』という意味があります。例えば桜、「満開の時こそが本来の桜の姿」なんて我々は思っていますが、それは人間が勝手に決めつけているだけのこと。緑に繁る姿も、万色調和した紅葉の姿も、凛として春を待つ姿も、心の中の色眼鏡を外して観れば、驚きを以って愛することができます。

とすれば、我々の何気ない毎日でも、きっとありのままの素晴らしいに彩られているはずです・・・。

★ お盆のこと（迎える日と送る日）

今年度のお盆の時期は右記の3箇所です。どの箇所でも構いませんので、ここ2年の間に御不幸が無かったご家庭でも、ご先祖様との4日間をご家族一同、心寄り添われてお過ごしいただきますようお願い致します。

平成28年	迎える日	送る日
新盆	7月13	7月16
月遅盆	8月13	8月16
旧暦盆	8月15	8月18

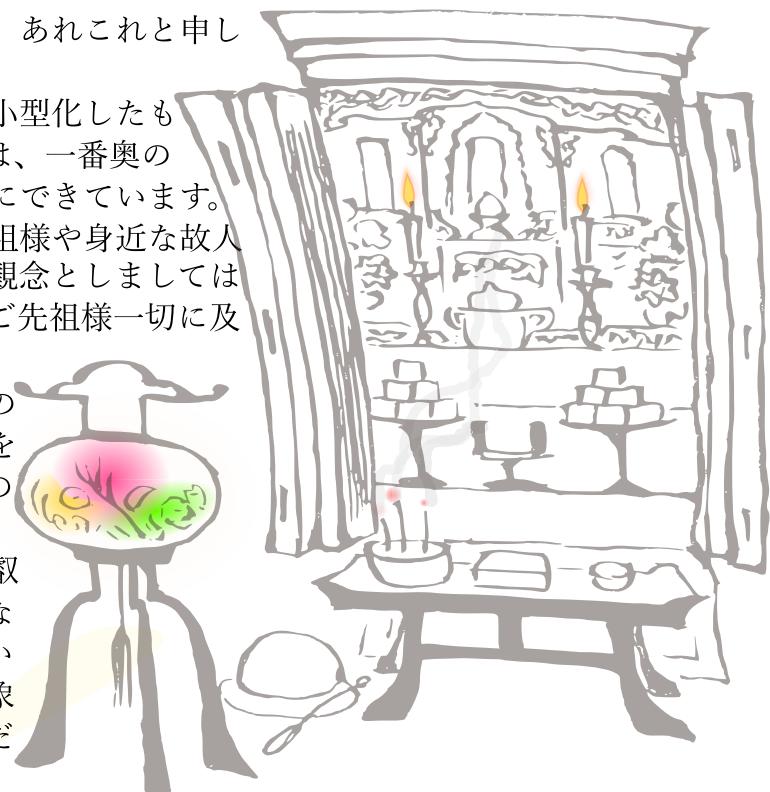
★回りて向かう～仏壇について その一～

今回は、各ご家庭での仏壇への向かい方について、あれこれと申し上げたいとおもいます。

そもそも、仏間と呼ばれる仏像を祀る為の部屋を小型化したものが仏壇の始まりです。基本的な仏壇の作りとしては、一番奥の高い段に各宗派の本尊様や開祖様をお祀りするようになります。

檀家様のお気持ちからすれば、一番高い段にご先祖様や身近な故人様をお祀りしたいところかと思われますが、仏壇の観念としましては第一に御本尊に向かう気持ちがその御本尊を通してご先祖様一切に及ぼすものとします。

我が宗派は天台宗系に属しておりますので、仏壇の御本尊としては阿弥陀様か御釈迦様をお祀りするのを勧めています。さらにその両脇には中国に於いての天台宗の開祖とされる天台大師智顥を向かって右に、左にはその智顥の教えを日本に於いて発展させ、比叡山を開かれた伝教大師最澄をお祀りします。しかしながら御本尊と両脇の諸尊も必ずしもそれと決まっているわけではなく、もし個人的に篤信の信仰を持つ対象があられる場合は、それらを本尊や脇仏としていただいても結構です。



さて近年急速に、「仏壇を持つ意味が解らない。」、「法事や墓参りは煩わしいだけ。」と言った素直な意見を耳にすることがあります。私はそれらの発言をする人々を批判する気はありませんし、私自身もかつては仏教の形式というものに対して少なからず懐疑的な見解を持っていました。しかし、あることに気づいてからは、『もっと形式を利用しよう！』という考えに変わりました。

はっきり申して仏像も仏壇も、あくまでも物に過ぎず、また我々人間も様々な物質が仮に集まって構成されているに過ぎません。けれども、そこで忘れてならないのがその『在り方』にあります。例えば足元に転がっている空き缶と皆さんの御家族、この二つを我々は平等に扱うことができません。なぜなら御家族は皆さんとの『在り方』に於いて極めて重要なものであり、空き缶は取るに足らないものだからです。

では何故『在り方』によって差がでるのか？、それは我々が物質の世界で活動しているながらも、証明不可能な意識の世界に強い臨場感を持って存在しているからです。さらに近代以前に比べて現代は高度情報社会と呼ばれ、我々の意識の世界はあまりにも多様化しています。そんな背景を踏まえると、今まで皆が当たり前にしてきたことに疑問や拒否感を感じる人が出てきて当然なのです。しかしそんな現代だからこそ、仏壇という形式をもっと利用すべきだと私は思います。

先に述べた私が気づいたあることとは、意識だけで信仰を成り立たせようとするその難しさと不自然さです。科学がどんなに進歩しても、人間ひとりがその自分の心を常に穏やかに保つことは不可能に近いといえます。ですからその不確定な意識にすべての重きを置くのではなくて、敢えて意識の外に礼拝の対象を設けて、さらにそこを『敬い』と『感謝』を行う窓口とする。そのような形式として仏壇を利用していくことは大いに善なることであると思います。

『敬い』とは頭ごなしに崇拜することではなく、何かを尊ぶことつまり大切に思うということ。そして『感謝』は有難いと思う気持ちを表すこと。どちらも何かを大切に想うという意味で根っこは同じです。

心は常に揺れ動いて定まらないもの。現代は善かれ悪かれあらゆる情報に翻弄される時代です。そこでは何かを大切に想うという気持ちも、心が不安定の時には非常に頼りないものとなってしまう、そんな時こそ仏壇の力は發揮されます。我々の心の中にある何かを大切に想う気持ちが、姿を変え不動の状態で物として形に顯れたもの、それが仏壇の形式と言えます。

心が定まらない時、仏壇に向かって手を掌わせば心は次第に仏壇の向こうに広がる世界に同調していきます。それは仏壇が淨らかに厳られていれば尚の事です。つまり仏壇とはそのような作用を働かせる言わば一つの装置であり、言い方は悪いですが大いに利用すべきものです。そうすることで我々はまた自分を立て直して元気に生きれる・・・。そのことが御先祖様への供養の第一歩でもあるのです。

今回は、大分と理念に偏った長文になってしまいましたが、次回・次々回に亘りましては、仏壇周りの実用的な知識を簡潔にご紹介したいと思います。

★檀家さんに聞く



仏教はインドから中国へ伝わる途中、中央アジアのオアシス国で篤く信仰されていました。そのオアシスでは古くからブドウが栽培され、中でもトルファンのブドウは現在でも有名です。

今回はそんなブドウの意外なお話と、家業を受継ぎ作物に懸ける想いについてお聞きしてきました。



果樹園には様々な品種100本余りが植えられています。

伊野町波川在住の畠山健さん



ブドウの花



畠山果樹園オリジナルの梨博水(ハクスイ)

畠山 健さん（以下）： 親父もそうやったけど、僕もヘルニアが腹側に出ちゅうで。(笑)

（坊）ずっと空を向いて身体を反らす作業ですもんねえ。

（畠山）土を耕すのは冬だけ。今年は400トン客土した。まあミネラル補給みたいなもんよ。

（坊）まずはこの果樹園の歴史から教えてもらいたいがですね。

（畠山）もとはお爺ちゃんが開墾して梨を植えたことから始まっちゃうねえ・・・。今でも心に残っちゃうのが直売を始めて

（坊）すごい手間がかかるんでしょうねえ。

（畠山）じつは高知県は沖縄県より紫外線が強いがね。最近その紫外線を透過する包紙なんかも開発されて、ここでも活用させてもらいゆう。とにかく今の時代の百姓は前例がない事をやっていかんと後が続いていかんがよ。意外に知られてないけど、世界で栽培されゆうブドウの内、生食用はたったの0.3%とかながね。それやきこれから時代、日本のスイーツみたいなブドウを海外の富裕層にもっと売り出していったら面白い事になると思う！

（坊）それは若い作り手の人も夢が持てますねえ。

（畠山）でも百姓は継がりを絶やさんことが地味に大事ながよ。学者さんの知識はあっても、実際に15年ばかりは経験してみると技術の応用がわからんねえ。研究室で開発された新しい事をいざやってみる時に、素人を集めてやらせてみてもできんがよ。昔からその作物の成長を見守ってきた百姓がおらにやいかんと思う。

（坊）今は目先の成果ばかりで、企業の研究開発の予算は毎年削られていきゅうらしいですきねえ・・・。

（畠山）「おんしゃは三代目の百姓ぞ！」ってお爺ちゃんによく言われたのを僕は謙虚に受け止めちゅう。(笑)

（坊）良いお話を聞けました。収穫が楽しみですね！

細長い果実が特徴。
食感はグミのよう。

販売時期

8月上旬から

10月下旬

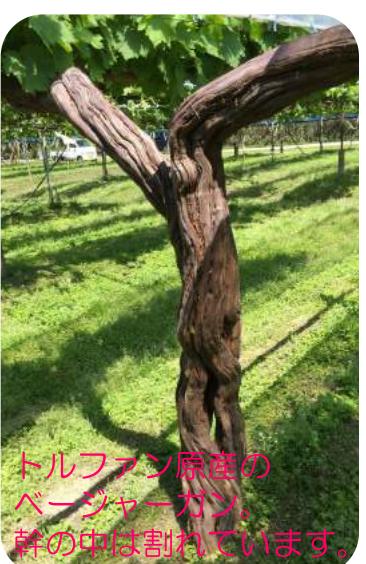
梨：7品種

ブドウ：40品種

電話 0889

892-0326

贈答用に対応可能



トルファン原産の
ベーシャーガン。
幹の中は割れています。



ベーシャーガンの実 (5月30日撮影)

お経のことば



～それ故に、この世で自らを島とし、自らをたよりとして、他人をたよりとせず、法を島とし、法をよりどころとして、他のものをよりどころとせずにあれ。」

大般涅槃經 訳 中村元

晩年のお釈迦様は北へ北へと旅をなさりました。恐らくそれはお釈迦様の故郷を最終目的地とする旅であつただろう、というのが現在の有力な説です。

実はこの時、とっくの昔にお釈迦様の故郷はある大国によって滅ぼされてしまっていたのですが、お釈迦様は敢えて承知の上で、故郷の土地を目指そうとされたと言われています。しかもそこまで辿り着けず、赤痢を患った病身の上にさらに食あたりを起し、御年80歳にしてクシナガラという町でお亡くなりになりました。悟りを開かれた御身でありながら、人生の終幕の場所として廃墟となった故郷を目指し、瞑想によって涼しく死を迎えることができたにもかかわらず、この世に受けた肉体を余すところなく燃やし尽くし、血便を滲ませながらも自身の足で懸命に歩みを続けられた・・・。大般涅槃經というお経にはそのようなお釈迦様の最期のご様子が生々しく伝えられています。

ある場所でお釈迦様の病が激痛となって現れた直後、お釈迦様がなされた説法の一部が上のお経のことばです。後世『島』が『灯』に置き換わり、自灯明・法灯明という言葉が生まれ、伝教大師のお言葉である『一隅を照らす』という大慈悲の精神の礎となりました。

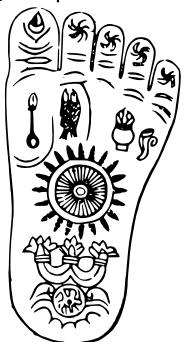
お経のことばの『他人をたよりとせず、～他のものをよりどころとせずにあれ。』とは、なにも孤独になれということではありません。簡単なことのようですが、我々の日常は無意識のうちに他に依存してしまっているのです。ここに一つの例を取り上げて説明したいと思います。

例えば『希望』という言葉。通常、我々は何か他のものに希望を見出します。「きっと来年は景気が良いだろう。」、「きっと配置替えで環境が良くなるだろう。」、「彼は我々の希望だよ。」、「まあ何とかなるだろう。」等々きりがありません。けれども、上のお経の言葉を実践するならば、希望とは本来自らの意志の中に見出すべきものなのです。加えて法とはつまり仏法＝お釈迦様の教えであり、これによって自らの意志による歩みのぐらつきと言えるものを日々修正していくのです。

つまり希望の源は自分の中の意志に眠っているのです。そしてその意志を実践することこそが幸せに通じていきます。

「幸せとは何だろう？」多くの人の疑問であり、また疑問の数だけ答えもあるのでしょうか、ひとつ共通して言えることは、幸せとは成ることでも得ることでも、さらには感じることでもなく、『行うこと』なのだということです。

毎夜こっそり取り出してニヤニヤ眺めるものではなく、隣の芝生ではないですが、他人と比べるものもなく、何らかのそれぞれの善なる意志によって一生懸命に行うこと、その意味に於いて誰もが幸せになれると言えるのではないでしょうか・・・。お釈迦様は常に『どう生きるか』を語られています。



●9月25日(日曜日) 千体流し彼岸会

ヒガンエ
場所・時間ともに未定



●毎月28日 柱源護摩供とヨーガ体操(無料)

ハシラモトゴマク
柱源護摩供は午前9時と午後3時の2回です。

※葬儀が重なると変更される場合があります。

ヨーガ体操のスケジュール

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
10時半～	△	○	○	○	△	○	○
16時半～	○	△	△	△	△	△	△



本山修験宗 大瀧山 護国寺

781-2155

高知県高岡郡日高村九頭291

☎ 0889-24-7244

ホームページ gokokuji.site

仏事に関するお悩み、ご質問、

行事に関するお問い合わせ等、

お気軽にお電話ください。

